

# 榎村正直

## —京の文明開化の「牽引車」—

西田 毅  
(大学名誉教授)

### ●フランス人画家の描く肖像画

今年(2010年)の春、西京区大枝の京都市立芸大の資料館で、フェリックス・レガメー Felix Regamey が描く「榎村正直像」が陳列されるという新聞記事を見て、早速、芸大のキャンパスに車を走らせた。季節はちょうど桜から新緑にかわる頃で、洛西ニュータウンは燦々とした陽光に照り輝いていた。

大学構内の薄暗い陳列室に榎村のスケッチ画が展示してあった。レガメーのサインと Koto Noto の日付が書き込んであった。写真でよく見慣れた榎村の横顔で、額が広く禿げあがり、顎から頬にか

けてふさふさとした髯をたくわえた、何となく西洋人くさい風貌に描かれていた。

それは「京都府画学校開校130年記念」と銘打った企画展で、明治の初め知事であった榎村が画学校(現、京都市立芸術大学)の開設に功労のあった人物として彼の肖像画を陳列したものと思われる。ちなみに、フェリックス・レガメー(1844・1907)は、画家で版画家であったフランス人ルイ・ピエール・レガメーを父にパリに生れた素描画家・風景画家として才能を発揮した人らしい。1876年リオンの実業家エミール・ギメの世界旅行に同行して日本を訪問してその魅力に取り付かれ、やがて日本紀行



フェリックス・レガメー作  
「榎村正直像」  
(京都市立芸術大学芸術資料館所蔵)

ケッチであろうか。

榎村正直(1834・96)がこの人物誌のシリーズに登場する理由は何か。言わずと知れた榎村は、同志社誕生の物語に大きく関わる人物である。周知のように、明治8年「官許同志社英学校」は榎村が京都府知事の任期中に認可された。東京遷都のあと、もはや「千年の王都」でなくなった京都が一地方都市として衰退するのを防ぐために、近代化と文明開化を急がなければならなかったとき、開明的で果敢な行動力の持主といわれた榎村は、積極的な勸業政策と教育政策に取り組み、古都の伝統を生かした文明開化を推進した。とりわけ、教育の近代化への取り組みは注目に値する。明治2年、明治政府の学制頒布(1872)に先立



榎村正直  
(同志社社史資料センター所蔵)

の方針決定など、小学校教育の浸透にはきわめて熱心であった。教育政策に熱意をもつ榎村は、中央政界の保守層や京都仏教界の強い反キリスト教的風潮のなかのように新島のキリスト教の理念にもとづく近代教育の実現を理解し、同志社の誕生に協力したのであろうか。

### ●出自とその略歴

まずはその簡単な経歴紹介からはじめよう。榎村正直(まきむら・まさなお)は、山口県美東町出身で1834年6月(天保5年5月)長州藩士族羽仁正純の次男として生まれ、榎村満久の養子になる。幼名は半九郎、号を龍山といった。幼時、剣術や砲術を学び、相州警衛に就く。文久3年藩の祐筆役、翌年には密用方間次役。慶応2年第二次征長戦争では大島口に出動した。明治維新のあと1868年、新政府の議政官試補となるが、同年、京都府に出仕。権大参事、大参事、参事などを歴任して1875年7月、京都府権知事、78年、二代目京都府知事に就任した。長州藩士木戸孝允とは知己で、幕末時代から政務の連絡役として重用していたが、維新の政変後、榎村を京都府

に出仕させ、華族出身で政治の経験不足の初代知事長谷信篤の補佐役に就けた。

京都府大参事就任のころから実質的に京都府政の実権を握り、長谷知事の退任とともに権知事になった。知事就任の期間は1875年から81年(明治14)まで、その後は元老院議員、87年(明治20)に男爵の爵位を受け、90年(明治23)に行政裁判所長に就任、やがて貴族院議員男爵(議員)となるなど頭職を歴任した。明治期の開明派官僚、知事としてその全般的な評価は高いが、一面で「豪腕」知事の強権的な政治手法に対する批判もある。1873年の小野組転籍拒否事件のとき、榎村が懲役刑に処されたことなどその代表的な例であろう。小野組転籍事件とは、京都で両替商を営む有力な金融業者小野組が江戸の本両替仲間に加え、明治新政府の樹立に際して財政援助をするなど政商的性格を強めていたが、七代目小野善助が為替方を命ぜられて営業の中心が東京に移っていたため、移転により税収が減り、京都の産業の衰退を心配した榎村が転籍願書を許可しなかった。そこで怒った小野組が裁判に訴えて勝訴となった

事件である。後に岩倉具視の斡旋で榎村は釈放されるのであるが、そこには、通常の官僚タイプとは異なるいかにも剛胆な人柄が表われている。なお、小野組はその後、三井組と合同して三井小野組合銀行を創立、1873年(明治6)第一国立銀行となった。

### ● 福澤諭吉と榎村・新島の接点

榎村は全国に先駆けて「町組」小学校や中学校の整備を行い、外国語学校や女紅場、画学校の設立、博物館、集書院(図書館)の開設などに尽力した。また勸業課長明石博高を実務責任者として積極的な勸業政策も実施した。産業科学分野では舎密局を設置して実用を目的とした理学、化学の研究を盛んにし、織殿(フランス式器械による織物伝習)や染殿(化学的な染色技術の習得)の設立、洋紙の製造、皮革場、牧畜場の開業など広範囲にわたる欧米の技術導入に熱心で、お雇い外国人の技術指導の協力もあって、それらが後の京都の精密工業や西陣織の技術革新、各種芸術関連産業の発展に大きく貢献したことは、夙に知られるところである。

ここでは、学校・教育事業に限定してその足跡をフォローして見よう。福澤諭吉は「京都学校の記」(『福澤諭吉全集』第20巻所収 昭和38年 岩波書店)で、京都の当時の先進的な学校整備について次のように論じている。彼は明治5年5月、郷里中津の学校視察の旅の途中京都に立ち寄り親しく府下の学校を一覧したが、そのときの感想がこの「京都学校の記」である。明治2年に上・下京区に64校の小学校と4校の中学校を創設した京都であるが、その授業内容から教員の身分、給料、各学校の規模、運営方法など詳細に亘って記述されている。とくに福澤が感心したのが、京の町衆の心意気で64校の基盤となった町組み組織を西洋の「スクール・チストリクト」に相当するものと解し、「区内の貧富貴賤を問わず、男女生れて7、8歳より13、4歳に至る者は、皆来て教えを受けるを許す」こと、学校の建設費用は官民折半で負担し、「市中の富豪」から得た贖金の残金は学校運営資金として活用すること、そして子供の有るなしに関わらず、「区内の戸毎に命じて半年に金一步を出さしめ、貸金の利息に合して永続の費に供せり」という

方法に注目している。さらに収支の監理は「毎区の年寄」が当たり、総年寄がその総括を行ない、官吏は経理に一切タッチしない。この民営システムはフランス・ウェーランドの経済学説に合致するという。このような住民の長による学校運営に、京都市民の先進的な自治意識を見出した福澤は、「民間に学校を設け人民を教育せんとするは余輩積年の宿志なりしに、今京都に來り始めて其の事業を見るを得たるは、其の悦恰も故郷に帰て知己朋友に逢ふが如し。大凡世間の人、この学校を見て感ぜざる者は、報国の心なき人といふべきなり」と手放しの礼賛を惜しまなかった。

福澤が称賛したこの町組みごとの学校は、榎村らの肝煎りになることは周知の事実であるが、小学校教育の普及にきわめて熱心であった彼はまた、『私用文語』、『小学女児手引草』などの教科書を自ら執筆して児童の就学督励に努め、しばしば自ら小学校を巡回して進級試験に立ち会ったという。

福澤は榎村と懇意で、書簡の交換もあったが、明治5年の京都訪問の際も榎村の案内で学校の視察を行なっており、京

都で世話になった礼状が残っている。もう一つの両者の接点は何といつても「京都慶応義塾」の設立であろう。すなわち福澤の京阪地方への分校計画は明治6年11月に大阪分校が、続いて明治7年2月に「京都慶応義塾」の開校となって実現をみた。現在の京都府庁の敷地内に、林毅陸の揮毫になる「京都慶応義塾跡」の建碑があり、碑面に福澤の筆跡で「独立自尊」の四文字が彫られている。京都校の開設にあたっては榎村の援助があったことは、運営責任者の莊田平五郎あて書簡に明らかである(莊田平五郎・名児耶六都あて明治7年1月4日付け書簡『福澤諭吉書簡集』第1巻 287、288頁)。文中で福澤は榎村の人となりについて、「この人は兼ねて私之知己、所謂役人はだにあらず、実着頼むべき人物なり」と信頼

の気持ちを率直に言い表している。「京都慶応義塾」は榎村のお声係にもかかわらず、不成功に終わり、約1年で撤退せざるを得なかった。そして、ちょうど、そのあとに同志社の計画が表面化したという次第である。榎村が洋学の振興に積極的であったとはいえ、もし慶応義塾の京都分校が成功しておれば、はたして同志社の計画が首尾よく実現したかどうか、それは疑問であろう。京都府顧問で榎村のブレーンであった山本覚馬は、この間の事情を何も記していないが、はたして、京都府における中等教育の振興整備について、それも語学教育や洋学を中心とした展望を彼はどう描いていたのだろうか。興味ある論点ではある。

### ● 書簡に見る新島と榎村正直

— 聖書講義・宣教師雇入れ問題

同志社開学直後の新島がもつとも頭を痛めた問題は、学校における聖書教育に対する官憲の圧力と仏教界の抵抗運動であった。明治政府によってキリストン禁制の高札は撤去されたが、国内にはまだまだ長年の間に培われたキリスト教に對

する不信や偏見が根深く残っていた。政府の外交課題であった不平等条約の改正や文明開化の政策、そして廃仏毀釈運動の雰囲気の中、仏教徒を中心とするキリスト教の進出に対する抵抗は強く、とりわけ仏教各派の本山が集中する京都はさながら仏教界のメッカであり、直接、学校業務を監督する官庁である京都府庁に対する働きかけはすさまじいものがあったと想像される。

同志社英学校の開校当初、新島が苦慮した問題の一つは、当局が学校内で聖書の授業を禁じた一項であった。同志社を伝道者養成学校(トレーニング・スクール)と考えていたアメリカン・ボードの宣教師たちの怒りは収まらなかった。宣教師団の抗議を抑え、開校願いの科目表にあった「聖經」を「修身学」や「講説」の名称に改めて、漸く開校にこぎつけたのであるが、視察巡覧にやってきた京都府庁の役人から、デイヴィスの授業を見て聖書を教えないという誓詞に反する「耶穌聖經」の授業ではないか、と厳しく咎められたことに対する新島の「弁明」書がある。それは榎村知事あての「ジェ



京都慶応義塾跡碑

ローム・D・デイヴィスの聖經講義に関する弁明」書簡(1879年6月7日付)である。新島曰く、校内で一つの教科書を用いた聖書の授業はしないと誓ったのは確かであるが、それは聖書を一切使用しないという意味ではないこと、講義科目として許された「修身学」の場合、授業においてキリストの教義に全く触れないという



横村知事宛「弁明」書の草稿 (同志社史資料センター所蔵)

ことは困難である」と説明に及んだところ、「修身学に関する分のみは苦しみからず」とのお許しを得たので、雇い入れ教師にその旨を伝えるおいたところ、

デイヴィスが「修身学」に関するキリストの教えを説明するにあたって、教科書上の不備を補う意味で止むを得ず聖書の一節を引いてその教えの解説に至ったのであると、まことに苦しい答弁を行なっている。他の一通はD.W.ラーネットの雇用継続に関する許可申請書である。

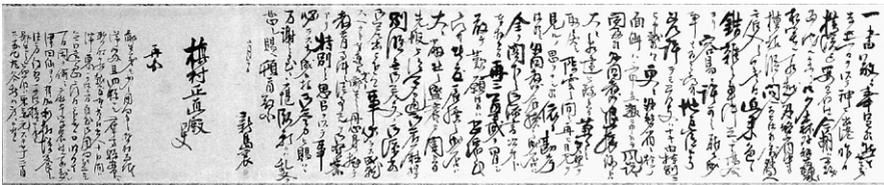
● 横村は同志社教育に好意的であったのか

「右手に聖書、左手に経済学」の人と称された同志社初期の教師であるD.W.ラーネットは、イェール出身の秀才で宣教師であり、かつまた日本で最初に本格的な政治経済学の講義をした人物でもある。彼の「政治経済学」講義ノートは弟子の森田久万人によって編集され、「The Lecture on Political Economy」 by Dr. Learned Collected by Mr. Morita Kumando」となっており残っている。ラーネットが新島を援けて同志社の教師になったのは明治9年4月であったが、その後、実に52年の長きにわたって同志社の教壇に立ち、「熊本バンド」の一団を始め優れた後進の育成に努めた。彼のキリスト教神学研究や経済学、そして社会主義の

紹介などがわが国に残したその学問的功績は不朽のものがあ

そのラーネットの雇用継続許可願い書に関する横村あての新島書簡がある。日付は明治12年2月3日付で、同志社は先にラーネットの雇用継続願いが京都府庁に提出していたが、京都府から異論が出た模様で、事態の打開に向けて新島が東上し森有礼外務大輔に会い政府の意向を確認したところ、地方官の許可状があれば外務省として殊更異を唱えるものでないとの言質を得たと述べて、「風説二聞き及び候外国教師退擯論トハ大ニ相違被致候間、兼而之失望ヲ取戻シ陰雲之間ニ再ビ日光ヲ見ルノ思ヲナシ候」と安堵の胸を撫で下ろした。

このような交渉を踏まえて、新島は知事に許可の添書を発行するよう働きかけた書簡である。ただ、文中「近來色々錯雑之事件之レアリ、場合ニヨリ容易ニ許可之難被成事も有之候得共」という森の発言に見られるように、地方官の許可だけで万事スムーズにはゆかないようであった。国と地方政府の何れが当時より大きな権限をもっていたのか、微妙なところである。



D.W.ラーネットの雇用継続許可願い書の草稿 (同志社史資料センター所蔵)

さて、横村と同志社問題を考える場合、二通の書簡から何が見えてくるであろうか。聖書講義の許可や外国人宣教師の雇用問題に関する新島の苦衷を横村がどこまで誠実に理解しようとしたのか、前の新島書簡からは直截には見えてこない。ただ、書簡に見える学務課長横井忠直何某の名前からあきらかにように、外務省の指示にしたがつて知事の下僚が校内授業の視察に来ていること、またラーネットの雇用許可の直接の事務処理はおそらく知

事とは別の係官が担当したのであることと考えれば、少なくとも横村が新島を悩ませた直接の当事者でないことの察しはつく。また、たとえば、2月3日付き書簡の二仲で述べられている寸暇を惜しんで麻布学農社に津田仙を訪ね、ユーカリの培養伝授に及んだ話など、私信に触れた親しみのある叙述を通して新島と横村が互いに心を開いた関係であったことが想像できる。また、「聖經」を「修身学」に代えて授業するようにとの提案は、横村の好意ある深謀遠慮という解釈も可能であろう。しかし、いずれにせよ、横村が近代教育における宗教の位置づけやキリスト教の役割をどう把握していたのか、この点に関する第一次史料の解明が急がれる。

ともあれ、横村正直が明治新政府内の進歩派の中心勢力と目されていた木戸孝允の影響下にあった人物であること、開明派の側近山本覚馬や明石博高の存在、そして明治日本の代表的な啓蒙知識人の福澤諭吉との懇意な関係、とりわけ短命に終わった「京都慶応義塾」に後続するかたちで同志社が現れたことの意味といった問題を、横村の人と思想を考える場合、看過できない視点としてあげておきたい。

- 参考文献
- 『同志社百年史』通史編1 『新島襄全集』1 福澤諭吉「京都学校の記」(『福澤諭吉全集』第20巻) 『福澤諭吉書簡集』第1巻 図説「京都府の歴史」(図説「日本の歴史」26) ほか

西田 毅(にしだ たけし)

1936年大阪府生まれ。62年同志社大学大学院法学研究科政治学専攻修了、法学部助手、専任講師、助教授を経て74年から教授、77年大学院教授。法学部長、人文研所長など歴任、2007年名誉教授。オックスフォード大学、北京日本学研究中心、武漢大学、アマースト大学、西安交通大学等の客員教授、研究員を勤める。日本政治学会、日本社会文学会理事等歴任。幕末から近代日本の政治思想を中心に日本政治思想史を専攻する。主要著作として『竹越三又集』(三二書房1985)、『近代日本政治思想史』(編著、ナカニシヤ出版1998)、『岩波文庫「新日本史」上下』(岩波書店2005)、『概説日本政治思想史』(編著、ミネルヴァ書房2009) ほか。